



音楽と真摯に向き合う広上淳一が 三者三様のアメリカ音楽を描き出す

コロンバス交響楽団音楽監督として活躍
N響でも多くのアメリカ音楽を紹介

バーバー、コープランド、アイヴズの3人はアメリカを代表する作曲家として知られているが、その音楽は三者三様。広上淳一は今回、その多様な世界に挑む。

広上とNHK交響楽団の共演歴を振り返ってみると、両者はこれまでもアメリカの音楽を取り上げてきた。古くは1993年8月にバーンスタイン、ガーシュウィン、ジョン・ウィリアムズを、2012年5月定期公演ではバーバーの《弦楽のためのアダージョ》とバーンスタインの《交響曲第1番「エレミア」》を、そして、記憶に新しいところだが、2018年1月定期公演でも、バーンスタインの《スラヴァ!》と《セレナード》を取り上げている。

また、広上の経歴を見ると分かるように、ヨーロッパのオーケストラだけでなく、2006年から2008年にかけて、アメリカのオハイオ州都コロンバスを拠点とするコロンバス交響楽団の音楽監督を務めていた。その時期には、日本ではあまり演奏される機会のない数多くのアメリカ音楽に出会ったのではないかと想像される。今回演奏される3人の作曲家の作品は、いずれも作曲家が20代の時に書かれた若い時期の作品だが、それだけに、その作曲家の個性、志向性というものがよく分かる作品とも言える。すべての音楽に対し、真摯に向かい合い、情熱を傾けて表現する広上らしい解釈、表現が楽しみである。

今月のマエストロ

広上淳一

Junichi Hirokami

文◎片桐卓也

Takuya Katagiri

「バーンスタイン先生」が初演した アイヴズ《交響曲第2番》

今回取り上げるアイヴズの《交響曲第2番》は1951年にバーンスタインとニューヨーク・フィルハーモニックによって初演された作品である。それは作曲されてから50年ほど後のことだった。バーンスタインは後にこの作品の録音も行っている。その事実を振り返ると、これは広上^{ひろ}の秘かなバーンスタインへのオマージュなのかもしれないと思う。広上は1984年に第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールに優勝した後、アムステルダム・コンセルトヘボウ管弦楽団(現ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団)に客演したバーンスタインにアシスタントとして付いていたことがある。それ以降、広上は今でも彼を「バーンスタイン先生」と呼んでいるのだが、それほど大きな影響を受けたということだろう。バーンスタインの演奏だけでなく、音楽活動全体への関心の深さにも共感するところがあるに違いない。忘れられた作品の発掘、知られざる作品の紹介ばかりではなく、バーンスタインが積極的に行っていた教育活動へも強い共感があるのだろう。広上も盛んな指揮活動の一方で、東京音楽大学の指揮科教授として、後進の育成に余念がない。

そして、コーブランド《オルガンと管弦楽のための交響曲》では鈴木優人との共演も楽しんだ。チェンバロ奏者、オルガン奏者、指揮者として活躍するだけでなく、作曲家でもある鈴木。

と^{さん}ても斬新な響きを持つコーブランドの作品において、広上と鈴木との共演は、その音楽の知られざる魅力を明らかにしてくれるだろう。

[かたぎり たくや／音楽ライター]

プロフィール

東京都生まれ。1984年第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールに優勝し、国際的な活動を開始。ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン交響楽団などの世界的オーケストラへ客演した。1991年から1995年にスウェーデンのノールショピング交響楽団首席指揮者、1998年から2000年にオランダのリンブルク交響楽団首席指揮者、1997年から2001年にロイヤル・リヴァプール・フィルハーモニー管弦楽団首席客演指揮者、2006年から2008年にコロンバス交響楽団音楽監督を歴任した。日本国内では1991年から2000年に日本フィルハーモニー交響楽団の正指揮者を務めた。オペラの指揮でもシドニー歌劇場でのヴェルディ《仮面舞踏会》などが高く評価され、新国立劇場でも《椿姫》などを指揮。2015年、京都市交響楽団とサントリー音楽賞を受賞。2016年には第36回有馬賞を受賞。現在は京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザー、札幌交響楽団友情客演指揮者、東京音楽大学指揮科教授を務める。N響とは定期的に共演し、情熱あふれる指揮が高い評価を得ている。[片桐卓也]

N響ホームページでは、広上淳一が11月Aプロの魅力を語るインタビュー記事をご覧ください



十八番のイタリア、ロシア音楽 その現代性を照らし出す情熱

何度も蒙を啓いてくれた
ノセダの指揮の虜に

魅力のよく分からない音楽というものが、誰にもあるだろう。筆者の場合、告白すると、ヴェルディのオペラが長らくそうだった。ある夏の夜に、ジャンンドレア・ノセダの指揮で《椿姫》を観るまでは――。

とりわけ忘れ難いのが、第2幕、ジェルモンがヴィオレッタのもとを訪ね、息子と縁を切るようにと迫るシーン。機械的に「ズン・チャ」を繰り返すだけのように思えた弦楽が、人物の心の動きに密着するように、ミリ単位で表情を変えていったのだ。気がつけば、心を驚^{おど}づかみにされていた。

これが2010年のトリノ王立歌劇場、日本公演でのこと。思えばノセダには、それ以前から、NHK交響楽団との演奏会で、こちらの蒙^{もう}を啓^{ひら}いてもらったものだ。珍しいラフマニノフ作曲、レスピーギ編曲の《音の絵》など、筆者は一聴^{とりこ}して虜になった。

そう、ノセダの棒はとても熱い。知られざる作品では、知って欲しいという情熱が、知られている作品では、こんな面にも気づいて欲しいという情熱^{らんらん}が、爛々と放射している。それでいて演奏は、決して粗くならないのである。

故国イタリアのトリノ王立歌劇場では、音楽監督を早く辞すことになったが、2021年の秋からスイスの名門、チューリヒ歌劇場の音楽総監督に就くことが決まっている。彼らはすでに

今月のマエストロ

ジャンンドレア・ノセダ

Gianandrea Noseda

文◎ 松木 篤也 | Atsuya Funaki

共演を重ねており、なかでも昨年の新制作、プロコフィエフの《歌劇「炎の天使」》は、双方に確かな手ごたえを残したようだ。

若手人気ソリストとの共演 興味が募る2つの協奏曲

早くから指揮者ワレリー・ゲルギエフに寵愛^{ちようあい}されただけあって、イタリア・オペラのみならず、ロシア・オペラにも長じたノセダ。コンサートでも、イタリア、ロシアの作品は十八番^{おはこ}と言ってよく、今回のN響定期公演でも、前者からレスピーギ《リュートのための古風な舞曲とアリア 第1組曲》が、後者からラフマニノフ《交響的舞曲》とプロコフィエフの《バレエ組曲「ロメオとジュリエット」》が演奏される。20世紀を生き、いわゆる前衛の陰になり「保守的」のレッテルを貼られてしまった、しかし紛れもなく現代性を示している作品。そうした作品を擁護せねばという使命感がノセダにはあるようで、今回の選曲を、この観点からとらえることも可能だろう。

チェロのナレク・アフナジャリャン、ピアノのアリス・紗良・オットといった、若手人気ソリストとの協奏曲（それぞれハイドンのハ長調とラヴェルのト長調）も興味が尽きない。

ところで、ノセダがチューリヒ行きを決めたのは、ひとつには、劇場総支配人アンドレアス・ホモキから、ワーグナーの《ニーベルングの指環》に取り組んでみないかと打診されたためという。プレミアは2022年。ノセダは、ドイツ語圏

の劇場でこれが実現できることをまたとない幸運とみており、同劇場座付きのオーケストラ、フィルハーモニア・チューリヒとの演奏会でも、ドイツ音楽に意欲を燃やしたいと述べている。昨シーズンには米国で、ワシントン・ナショナル交響楽団の音楽監督業も始まった。N響にも、新たな実りを携えて再訪してくれることだろう。

[ふなき あつや／音楽評論家]

プロフィール

1964年、ミラノに生まれ、長じて同地の音楽院に学んだ。ブレイクスルーの年は1997年。その3年前に、カダケス管弦楽団主催の国際指揮者コンクールで優勝したのを受け、同団の首席指揮者に就任、今日まで同地位にある。首席としては他にBBCフィルハーモニックを指揮（2002～2011年）。2017/18年シーズンからは、ワシントン・ナショナル交響楽団の音楽監督の座にある。首席客演指揮者を務めた楽団も、ロッテルダム・フィルハーモニ管弦楽団、ロンドン、ピッツバーグ両交響楽団ほか多数。レスピーギ、カゼッラなど20世紀イタリアの、あるいはリストやラフマニノフの管弦楽作品の普及に尽力した。オペラに目を転じれば、マリンスキー劇場の首席客演指揮者に指名されたのが、やはり1997年。以後、おもに伊、仏、露の作品を扱いながら、国際舞台で精力的に活動。2007年から2018年までトリノ王立歌劇場の音楽監督に就いている。メトロポリタン・オペラには2002年に、ザルツブルク音楽祭にもオペラで2015年にデビュー。2021/22年シーズンよりチューリヒ歌劇場の音楽総監督に就任予定。NHK交響楽団とは、2005年以降、何度も共演している。[松木篤也]

PROGRAM

A

第1899回

NHKホール

11/24 土 6:00pm

11/25 日 3:00pm

指揮 | 広上淳一 | 指揮者プロフィールはp.4

オルガン | 鈴木優人

ゲスト・コンサートマスター | 白井 圭◆

◆白井 圭: 1983年、トリニダード トバゴ生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校を経て同大学を卒業。2007年からウィーン国立音楽大学に留学。ウィーン国立歌劇場管弦楽団の契約団員として在籍したほか、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団、ケルンWDR交響楽団をはじめ、国内外のオーケストラにゲスト・コンサートマスターとして招かれている。

バーバー

シェリーによる一場面のための音楽
作品7 [10']

コープランド

オルガンと管弦楽のための交響曲
[25']

I 前奏曲: アンダンテ

II スケルツォ: アレグロ・モルトーモデラート

III 終曲: レントーピウ・モッソ (アレグロ・モデラート)

—— 休憩 ——

アイヴズ

交響曲 第2番 [35']

I アンダンテ・モデラート

II アレグロ・モルト (コン・スピリット)

III アダージョ・カンタービレ

IV レント・マエストロソ

V アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ

Artist Profile

鈴木優人 (オルガン)



© Maso Boggess

鈴木優人は、チェンバロやオルガン、ピアノの演奏、指揮、作曲、プロデュースなど幅広い領域で才気を放っている。1981年オランダのデン・ハーグに生まれ、東京藝術大学作曲科卒業後、同大学院古楽科を修了。ハーグ王立音楽院修士課程オルガン科を首席、即興演奏科を荣誉賞つきで修了し、アムステルダム音楽院のチェンバロ科でも学んだ。2018年秋、首席指揮者に就任したバッハ・コレギウム・ジャパンでの演奏をはじめ、ソロや室内楽でも精力的に活動。ルネサンスやバロックを得意とするだけでなく、自作を含む同時代までの音楽に柔軟な感性を示す。2017年11月に指揮したモンテヴェルディの歌劇《ボッペアの戴冠》

でも好評を博した。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでバロックから現代にいたるプログラムをオリジナル楽器で演奏するほか、ダンスや映像とのコラボレーションも意欲的に行う。調布国際音楽祭ではエグゼクティブ・プロデューサーとして活躍。日本とオランダで教会オルガニストも務める。

[青澤隆明／音楽評論家]

Program Notes | 沼野雄司

「明るく開放的」というあたりがアメリカ音楽をめぐる一般的なイメージだろうか。もちろんそういう側面もあるだろう。しかし、アメリカという国を知れば知るほど、そしてその音楽を知れば知るほど、そこには暗く深い潮の流れのようなものが横たわっていることが分かる。本日の3人の作曲家は皆、確実にその深みに手を触れ、その暗さに^{おのの}慄きながら五線紙に向かった人々である。そして面白いことに、彼らがいずれも20代で書いたこれら3曲は、それぞれまったく異なった意味で、なんともアメリカ的な音楽なのだ。

バーバー

シェリーによる一場面のための音楽 作品7

サミュエル・バーバー(1910～1981)は、実にアメリカ的な作曲家である。

単に分かりやすく美しい旋律を書いたからではない。第1次世界大戦参戦を契機にしてアメリカ中に浸透した「反ドイツ」の流れの中で、新しい形のロマン派を模索せざるを得なくなったという創作の経緯が、20世紀初頭のアメリカ音楽界を象徴しているのだ。実際、青年期の彼はドイツ・ロマン派に薫陶を受けながらも、しかし意識的にそこから距離を置かざるを得なかった。そしてオペラというジャンルに惹かれたこと、作曲家カルロ・メノッティと深い親交(ほとんど恋愛に近いものだった)を結んだことを契機にして、イタリアの音楽に強く傾斜してゆくことになる。

まぎれもなくロマン派を基盤にしながらも、より大ぶりの旋律をふんだんに取り入れた彼の作風は、まさに「新ロマン主義」というにふさわしい。やがてその音楽は、映画音楽をはじめとするアメリカの大衆音楽に、大きな影響を与えることになるだろう。

本作も、イタリアと少なからぬ関係を持つ作品だ。1933年、23歳のバーバーはメノッティとともにイタリアのカデリアーノでひと夏を過ごした。この時、ルガーノ湖やアルプスの山並みに至る神話的な風景から、彼はロマン派詩人シェリーの『鎖を解かれたプロメテウス』第2幕5場を想起したという。プロメテウスの恋人にして美の象徴であるエイシヤ(Asia)が、彼女を讃^{たた}える天の声を耳にする、静かな喜びに満ちた個所だ。

かくしてバーバーのスコアは、神話の前兆を、まずはさざ波のような弦楽器で示す。少しずつ感情を高ぶらせてゆく旋律は、やがて金管楽器の揺らぎを伴いながら、喜び

を爆発させるようなフォルティッシモに成長。頂点に達したのちにも、その輝かしい響きは思わぬほど長く、どこまでも延長される。この息の長さこそが、バーバーの真骨頂であり、彼がイタリア音楽から学んだ術に他ならない。運命のようにティンパニが鳴った後は、うっすらと響きの余韻が棚引いて、夢のような10分間が終わる。

作曲年代	1933年夏
初演	1935年3月24日、ヴェルナー・ヤンセン指揮ニューヨーク・フィルハーモニックによる
楽器編成	フルート3、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット3、ホルン4、 トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、グロックンシュピール、タムタム、シンバル、サ スペンデッドシンバル、ハープ1、弦楽

コーブラント

オルガンと管弦楽のための交響曲

アーロン・コーブラント(1900～1990)もまた、きわめてアメリカ的な作曲家である。

ただし、それは彼が《サロン・メキシコ》や《ロデオ》などの底抜けに明るく親しみやすい作品を書いたからではない。ロシア系移民の子としてブルックリンに生まれ、パリに留学して作曲を学び、ジャズや民俗芸術に惹かれたかと思えば、密かに無調や十二音音楽も試し、最後は極度の寡作の中で人生を終える……。こんなふうに複雑な背景が交錯する具合が、まさにアメリカ的なのだ。また、研究者のエリザベス・クリストは、一時期の彼がソ連や共産党に強いシンパシーを覚え、さまざまな労働歌を書いていたことを明らかにしている。決して一筋縄ではいかない人物なのである。

第1次世界大戦を期にして、アメリカではドイツ音楽離れが急速に進むが、代わりのモデルとして浮上したのがフランス音楽だった。コーブラントも早速パリに渡り、名教師ナディア・ブーランジェに師事。3年間の修業を終える頃に本作は完成し、翌年に初演された。ほとんど間を置かずしてクーセヴィツキー指揮のボストン交響楽団でも再演されているから、出世作といってよいだろう。全体は3つの楽章からなる。

第1楽章(前奏曲)は、フルートの独奏で幕をあける。8音音階(全音と半音が交互に配される)を軸にした不安定な響きと、完全な調性が入れ子を成す様子が面白い。第2楽章は、細かい反復が支配する音楽。オルガンの用法やポリリズム的な処理は、のちのミニマル音楽を思わせよう。オルガンの導入部はおそらく、フランス民謡《月の光に》の引用(ドレミレ・ドミレレ・ド)。もっとも長い第3楽章は、ソナタ形式的なフォルムを持つが(もとは第1楽章として構想されたらしい)、弦楽器による序奏部から一貫して、低音部の歩みがパッサカリアのように打ち込まれる。やがて同時代のショスタコーヴィチを思わせる歪んだ音程の連鎖を経ると、オーケストラとオルガンによる壮大なクライマックスへと到達。

ちなみに、この曲はのちに《交響曲第1番》として改作された(1931年)。2つのスコア

を並べてみるとよくわかるのだが、曲の基本的な構造はそのまま、オルガンのパートが時に弦楽器に、時には金管楽器に移されている。結果として、常に背景で架空のオルガンが鳴り響いているような、不思議な響きの交響曲が誕生したのだった。

作曲年代	1921～1924年
初演	1925年1月11日、ウォルター・ダムロッシュ指揮、ナディア・ブーランジェの独奏による
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シロフォン、シンバル、サスペンデッドシンバル、ウッドブロック、大太鼓、小太鼓、タン布林、ハープ2、チェレスタ1、弦楽、オルガンソロ

アイヴズ

交響曲 第2番

チャールズ・アイヴズ(1874～1954)はアメリカ的な作曲家だろうか？

確かに、アメリカ民謡の引用は彼のトレードマークだし、保険代理店社長と作曲家の二足の草鞋^{わらじ}を履いていたあたりも、なんだかアメリカ的だ(ついでにいえば、彼はこの国の富豪がよくそうするように、保険業で得た財産を、恵まれない多くの現代作曲家のために投じている)。また、微分音の使用や多調性をはじめとする破天荒なアイディアの数々は、伝統を持たない新世界にいたからこそ発想されたのだともいえよう。しかし、ひとつだけ、アイヴズが20世紀前半の他のアメリカ人作曲家と大きく異なっているところがある。それは、ヨーロッパ音楽にコンプレックスを持っていなかった点だ。

これは少々うがった見方なのかもしれない。しかし、当時、多くのアメリカの作曲家は、ヨーロッパへの劣等感をバネにして活動を展開していた。つまりドイツやフランスの音楽を学びながらも、それを乗り越えた先にあるはずの「アメリカ国民音楽」を必死に希求していたわけである。ところが、アイヴズという人には不思議とこうした姿勢が見られない。それは彼の冷静で淡白な性格のせいなのかもしれないし、ユニークな音楽の手ほどきを授けた父親の影響なのかもしれない。いずれにしても彼は、ヨーロッパ人と張り合ったり、「乗り越えたり」しようとは考えていなかったはずだ。おそらく彼独特の奔放さ、自由さは、そんな肩肘張らない姿勢に由来しており、逆説的にも、だからこそアイヴズ作品には、他に類例のない「アメリカ性」が刻印されているように思われるのである。

イエール大学在学中の1897年に着手され(ただし、ごく一部のスケッチは1889年にまでさかのぼるという)、1902年に完成した本作は、その格好の例だろう。この時期の作品であるから、もちろん無調で書かれているわけではないし、奇抜な不協和音もほとんどあらわれない。全体はまさに19世紀音楽^{はんちゆう}の範疇で進行してゆくといつてよいのだが、そのバランスを随所で崩すのが既成楽曲の引用。なにしろ、油断しているといたところで民謡や大衆歌の旋律が導入されて、重層的な音響空間を形成するのだ。この引用によって、交響

曲という枠組みは、ぐにゃりと変形して、いくぶん奇怪な音風景が展開することになる。

アメリカの音楽学者バークホルダーによれば、作曲家はここで、アメリカの旋律素材と「交響曲」というヨーロッパの伝統を1曲の中に共存させようと試みたのだという。しかしアイヴズ自身はあっけらかんと、「故郷コネチカット州の田舎で歌われていた民衆の音楽を、一種のジョークのようにして対位的に扱ってみた」と述懐している。本当に冗談なのかはともかくとしても、「伝統」とか「共存」とかいうフォーマルな思考とは少しばかり距離を置いた地点に、アイヴズ作品ならではの魅力があらう。

もっとも、あまりにもユニークな作品だけあって、当初、全く発表のあてはなし。結局、曲が完成してから50年近くを経た1951年、当時の新鋭指揮者レナード・バーンスタインによって、ようやくこの大作は初演されたのだった。70代の半ばになっていたアイヴズは会場にはでかけず、自宅キッチンのラジオで初演を聴いたという。

全体は5つの楽章からなるが、1～2楽章、4～5楽章は休みなしで続けて演奏される。

第1楽章(アンダンテ・モデラート)は序奏的な役割。弦楽器の分厚いポリフォニーが、まずは若き作曲者の堅実な筆力を示しているが、ホルンによる《コロンビア 大洋の宝》の旋律がふわりと浮かび上がってくると、音楽は一気にアイヴズ独特の世界へ。やがて、付点リズムの旋律が木管のアンサンブルで導入されると、**第2楽章**(アレグロ・モルト)の始まり。ヘブライの賛歌をはじめ、さまざまな旋律が湧き出してくる様子は、オペラ序曲のようでとてもカラフルだ(他の舞台音楽の序曲として構想されたという説もある)。

第3楽章(アダージョ・カンタービレ)は中央に置かれた緩徐楽章。3部形式によるが、意外に手の込んだ対位的動きが隠された主部に、同音反復リズムによる中間部が対置されている。そして後半では冒頭部の反復に続いて、アメリカ賛歌《美しきアメリカ》が登場。

第4楽章(レント・マエストロソ)は、冒頭楽章と同じ素材による短い音楽であり、終楽章への序奏の役割を果たす。ただし構成が縮小されているのに加えて、オーケストレーションも管楽器主体へと変更されている。続く**第5楽章**(アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ)は、もっとも手の込んだ、そしてもっとも多様な引用をちりばめた音楽。冒頭の軽快な主題が、ほどなくするとフォスターの《草競馬》と融合し、さらには鼓笛隊の響きや《久しき昔》の旋律などが入れ代わり立ち代わり出現。そして冒頭楽章で使われた《コロンビア 大洋の宝》が再び顔を出すと、ここにいたって作品の時空はメビウスの輪のような歪みを呈し、回想とも散策ともつかない形で楽想が乱舞する。

そして、驚いてしまうのは最後の瞬間。モーツァルトの《音楽の戯れ》を思わせる壮絶な仕掛けが何かの厄災のように聴衆にふりかかって、茫然自失の内に全曲を閉じる。

作曲年代	1897～1902年
初演	1951年2月22日、レナード・バーンスタイン指揮ニューヨーク・フィルハーモニックによる
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、小太鼓、大太鼓、トライアングル、弦楽

B

第1898回

サントリーホール

11/14 水 7:00pm

11/15 木 7:00pm

指揮 | ジャンアンドレア・ノセダ | 指揮者プロフィールはp.6

チェロ | ナレク・アフナジャリヤン

コンサートマスター | 篠崎史紀

レスピーギ

リュートのための古風な舞曲とアリア

第1組曲 [15']

- I オルランド伯爵
- II ガイヤルド舞曲
- III ヴィラネル
- IV パッサメッヅ舞曲と仮面舞踏会

ハイドン

チェロ協奏曲 第1番 ハ長調

Hob. VIIb-1 [24']

- I モデラート
- II アダージョ
- III 終曲: アレグロ・モルト

— 休憩 —

ラフマニノフ

交響的舞曲 作品45 [35']

- I ノン・アレグロ
- II アンダンテ・コン・モート (テンポ・ディ・ヴァルス)
- III レント・アッサイー・アレグロ・ヴィヴァーチェ

Artist Profile

ナレク・アフナジャリヤン (チェロ)



1988年、アルメニア、エレバン音楽一家に生まれる。晩年のムスティスラフ・ロストロポーヴィチの薫陶を受ける。モスクワ音楽院でアレクセイ・セレズニョフに、ニューイングランド音楽院でローレンス・レッサーに師事。2006年、アルメニアでのアラム・ハチャトゥリヤン国際コンクールで第1位を獲得。2008年にはヤング・コンサート・アーティスト・インターナショナル・オーディションで第1位となり、カーネギー・ホールにデビュー。2011年、チャイコフスキー国際コンクール・チェロ部門に優勝し、国際的に注目を集める。

2014年、BBCのニュー・ジェネレーション・アーティストに選ばれ、2016年にBBCプロムスでハイドンの《チェロ協奏曲第1番》を弾く。これまでに、バリ管弦楽団、ロンドン交響楽団、マリンスキー劇場管弦楽団、シカゴ交響楽団などと共演。NHK交響楽団とは、2016年1月に初

共演し、シヨスタコーヴィチの《チェロ協奏曲第1番》のソロを務めた。ロシア音楽を得意とするが、ドイツ音楽や現代音楽にも積極的に取り組む。使用楽器は1707年製ジョセフ・ガールネリ。

[山田治生／音楽評論家]

Program Notes | 安川智子

過去の音楽は、演奏されることで現代の音響となる。楽譜を通して私たちは歴史と対話し、演奏を通して今に^{よみがえ}甦らせる。20世紀イタリアの作曲家オットリーノ・レスピーギ(1879～1936)が図書館で見出した16世紀のリュート作品と、20世紀にプラハの博物館で発見されたフランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)の《チェロ協奏曲》。そして20世紀ロシアの作曲家セルゲイ・ラフマニノフ(1873～1943)が人生の最後に残した《交響的舞曲》には、古き聖歌が用いられている。時空を超えた音楽の交感を味わいたい。

レスピーギ

リュートのための古風な舞曲とアリア 第1組曲

レスピーギは、本作品と同名の組曲を全部で3作品残している。1917年に作曲された《第1組曲》は、イタリアの音楽学者であるオスカル・キレゾッティが19世紀末に^{へんさん}編纂したリュート曲集から、16世紀の4曲を選び、管弦楽に編曲したものである。キレゾッティの曲集では、古いリュートのタブラチュア(奏法譜)の一例が掲載されたうえで各曲は五線譜にすべて書き換えられている。編曲当時、ローマの聖チェチーリア音楽院で^{きょうべん}教鞭をとっていたレスピーギは、タブラチュアを学生たちに見せ、初演の数か月前には、指揮を担当するベルナルディーノ・モリナリーを前に授業で自作品を試演した。当時モリナリーが監督を務めていたアウグステオ管弦楽団では、古楽が積極的に演奏されていたようである。

編成は各曲で異なるが、第3曲を除くすべてに、チェンバロが指定されている。当時チェンバロは、博物館の楽器から、20世紀の新しい楽器へと変化の途上にあった。第1曲〈オルランド伯爵〉は、シモーネ・モリナーロの1599年の作品。第2曲〈ガイヤルド舞曲〉は、ヴィンツェンツォ・ガリレイの作。第3曲〈ヴィラネル〉と第4曲〈パッサメツォ舞曲と仮面舞踏会〉は、作者不詳である。オーボエを主旋律においたバロック・オーケストラ編成(第1曲)から、チェンバロを斬新に用いた現代的な響きまで、簡潔な素材から自在にアレンジするレスピーギの管弦楽法の技を堪能できる。

作曲年代	1917年
初演	1917年12月16日、ローマ、ベルナルディーノ・モリナリー指揮
楽器編成	フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、ファゴット2、ホルン2、トランペット1、ハーブ1、チェンバロ1、弦楽

チェロ協奏曲 第1番 ハ長調 Hob. VIIb-1

1961年にプラハの国立博物館で筆写譜が発見されたことで世に知られることになったハイドンの《チェロ協奏曲第1番》は、ハイドンがハンガリーのエステルハージ侯爵家に宮廷副楽長として赴任してまもなく、1760年代前半に作曲されたと考えられている。当時の宮廷楽団は小規模編成で、ヴァイオリン以外の弦楽器は1名ずつ、そしてオーボエとホルンが各2名、ファゴットが1名であった。本作品はこの編成に準じている。楽団には名チェリスト、ヨーゼフ・ワイグル(1740～1820)がいたため、独奏パートは彼のために書かれたとされている。ワイグルは同時にオーケストラのチェロ・パートも受け持ったと考えられる。1760年にイタリアのルイージ・ボッケリーニは、通奏低音を排した新しい《弦楽三重奏曲》を発表し、同時期にハイドンも《弦楽四重奏曲》(作品1)にとりかかり始めている。《チェロ協奏曲第1番》が書かれた時期は、通奏低音としての鍵盤楽器の廃止やチェロの独立など、ちょうどバロック時代から古典派への過渡期であった。

ハイドンの弦楽四重奏曲とともにひとつの様式的完成をみたとと言われるソナタ形式が、全楽章に見出される。第1楽章モデラート(4/4拍子、ハ長調)では、バロック時代の協奏曲に特徴的なリトルネルロ形式(独奏部分を間に挟んで同じ主題部がくり返し戻ってくる)の形も残している。オーケストラによるハ長調の主題部ののち、独奏チェロが同じ主題を奏するが、美しい7度の下行音程を含むチェロの新たな楽想からト長調へと転調し、オーケストラとともに展開部に入る。ハ長調による再現部は、独奏チェロによる主題で始まる。第2楽章アダージョ(2/4拍子、ヘ長調)は弦楽のみの室内乐的緩徐楽章である。第3楽章アレグロ・モルト(4/4拍子、ハ長調)は快速なテンポで、チェロの細かい刻みや跳躍、叙情的な旋律など、名技が散りばめられている。

作曲年代	1761～1765年頃
初演	不明
楽器編成	オーボエ2、ホルン2、弦楽、チェロ・ソロ

ラフマニノフ

交響的舞曲 作品45

1934年以来、スイスのルツェルン湖畔に建てた別荘を拠点に、欧州で精力的な演奏ツアーを行っていたラフマニノフは、第2次世界大戦の戦禍を避け、1939年8月11日のルツェルン国際音楽祭での演奏を最後に、再びニューヨークへ渡った。1917年に故国ロシアから亡命していた彼は、今度はヨーロッパとも完全に決別しなければならなかった。当時のアメリカでは、クーセヴィツキーがボストン交響楽団を振り、トスカニー

ニがNBC交響楽団を率い、オーマンディがフィラデルフィア管弦楽団の音楽監督を務めていた。この一大音楽消費国となったアメリカで、1940年の夏、内からこみ上げる作曲意欲によって短期間で書き上げられた人生最後の作品が《交響的舞曲》である。

舞曲の作曲に向かった理由のひとつには、自作《パガニーニの主題による狂詩曲》(1934年)が1939年にミハイル・フォーキンの振り付けでバレエ化されたことがあげられる。ラフマニノフはまず1940年8月21日に、初演指揮者となるオーマンディに宛てて、新しい管弦楽曲のオーケストレーションにとりかかったことを伝えている。この時のタイトルは「幻想的舞曲」だったが、直後に「交響的舞曲」と変更している。9月にはフォーキンの前でもピアノで試演し、バレエ化を打診している。フォーキンの9月23日付の手紙からは大変気に入った様子うかがえるが、1点、ラフマニノフがワルツのリズムにとらわれすぎているのではないかと、バレエ化にあたってワルツのリズムの支えは必要ないと、指摘している。結局バレエ化は1942年のフォーキンの死により、実現されずに終わった。

各楽章とも舞曲に特徴的な3部形式に基づいている。

第1楽章 ノン・アレグロ。独特の厳しさを湛えた行進曲風舞曲に挟まれた中間部では、一転して木管楽器による室内乐的なアンサンブルが牧歌的な旋律を奏でる。ここでオーボエ、クラリネットに続く第3の木管楽器として、ラフマニノフがこだわったアルト・サクソフォーンが登場し、旋律を主導する。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート(ワルツのテンポで)。ラヴェルの《ラ・ヴァルス》風のワルツはすぐにロシアの憂愁を湛えたワルツへと変化する。ヴァイオリンから木管楽器へと受け渡される独奏旋律が不気味な案内人のようにワルツを導く。

第3楽章 レント・アッサイー・アレグロ・ヴィヴァーチェ。短い導入ののち鐘が鳴り、「死の舞踏」が暗示される。やがてカトリック教会の死者のためのミサ「レクイエム」で歌われた〈怒りの日〉の旋律が、木琴(シロフォン)で奏される(第1主題)。またかつてラフマニノフがロシア正教会の奉神礼音楽として作曲した《徹夜禱》(1915年)の第9曲〈主よ、汝はあがめ讃められる〉の旋律が、第2主題として引用される。幻想的な中間部を経て、アレグロ・ヴィヴァーチェの再現部では2つの主題が展開する。《徹夜禱》の旋律が〈怒りの日〉を凌駕して、ラフマニノフが「アレルヤ」と書き込んだ勇壮的なコーダを経て終わる。

時を刻む舞踏のリズムに乗った30分強の《交響的舞曲》には、自作も多く引用され、映画のモンタージュのようにラフマニノフの人生そのものが凝縮されている。

作曲年代	1940年
初演	1941年1月3日、ユージン・オーマンディ指揮、フィラデルフィア管弦楽団
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、アルト・サクソフォーン1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、タンブリン、小太鼓、大太鼓、シンバル、サスペンデッドシンバル、タムタム、グロッケンシュピール、シロフォン、チューブラー・ベル、ハープ1、ピアノ1、弦楽

PROGRAM

C

第1897回

NHKホール

11/9 金 7:00pm

11/10 土 3:00pm

指揮 | ジャンンドレア・ノセダ | 指揮者プロフィールは p.6

ピアノ | アリス・紗良・オット

コンサートマスター | 篠崎史紀

ラヴェル

ピアノ協奏曲 ト長調 [22']

I アレグラメンテ

II アダージョ・アッサイ

III プレスト

—— 休憩 ——

プロコフィエフ

バレエ組曲「ロメオとジュリエット」(抜粋)

[56']

モンタギュー家とキャピュレット家

少女ジュリエット

メヌエット

仮面

踊り

朝の歌

修道士ロレンス

ロメオとジュリエットの別れ

群衆の踊り

朝の踊り

アンティル諸島から来た娘たちの踊り

タイボルトの死

ジュリエットの墓の前のロメオ

ジュリエットの死

Artist Profile

アリス・紗良・オット (ピアノ)



© Jorand Becker

ドイツと日本の血を引くアリス・紗良・オットは、ミュンヘンで育ち、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学で学んだ。ヨーロッパの数々のピアノ・コンクールで最高位に輝き、2008年にドイツのメジャー・レーベルと専属契約を結ぶ。これまで、ロリン・マゼール、パーヴォ・ヤルヴィ、チョン・ミョンフン、ジャンンドレア・ノセダやグスターボ・ドゥダメルなどの著名指揮者やオーケストラと共演を重ねるほか、近年ではアイスランド人作曲家のオーラヴル・アルナルズとのコラボレーションなど、意欲的な演奏活動にも取り組んでいる。

そのほか、ドイツの有名高級ブランドバッグへのデザイン提供や、メッセージアプリ用スタンプの

リリースなど、音楽以外の分野でも才能を発揮。幅広い層から人気を集めている。

NHK交響楽団とは、マゼールの指揮で2012年に初共演、2015年には、東京と北海道4都市、青森、福島をまわるツアーで、ベートーヴェンの《ピアノ協奏曲第3番》を演奏している。

[高坂はる香／音楽ライター]

Program Notes | 成田麗奈

20世紀初頭のフランスとロシアを代表する作曲家モーリス・ラヴェル(1875～1937)とセルгей・プロコフィエフ(1891～1953)は、1930年代前半にそれぞれの転機を迎える。常に前衛性が求められる西ヨーロッパでの活動に限界を感じた2人は、新たな環境での活動に可能性を見出し、《ピアノ協奏曲ト長調》と《ロメオとジュリエット》を生み出した。この2作品は、オーケストレーションの精彩という点で共通しており、各楽器の奏でる旋律の美しさ、楽器の組み合わせによる音色や音響の多彩さが聴きどころだ。

ラヴェル

ピアノ協奏曲ト長調

第1次世界大戦終戦以降、長らくドビュッシーのライバルと目されてきたラヴェルは、戦争の衝撃と母の死による精神的な落ち込みもあってか創作活動が停滞し、彼を「終わった」作曲家と揶揄する者すら現れた。こうした中でラヴェルの創作を後押ししたのは、フランス国外での演奏旅行であった。とりわけアメリカでは彼の作品が大喝采を浴び、ガーシュウィンをはじめとする現地の音楽家たちとの交流も大いに刺激となった。かくして、1929年から1931年にかけて、ラヴェルは生涯で初めてピアノ協奏曲を作曲する。《ト長調》の作曲中、ピアニストのウィットゲンシュタインから《左手のためのピアノ協奏曲》を委嘱され、2作品を並行して書き進め、全く対照的な協奏曲を完成させた。

ラヴェル自身によると、この作品ではピアノという楽器の特質に逆らわない、快活華麗な要素を重視しているという。オーケストレーションにもラヴェルの腕が冴えわたり、ピアノはオーケストラの中に自然に溶け込み、管楽器の独奏の数々はピアノ独奏と同等もしくはそれ以上に活躍している。また、ジャズの要素も柔軟に取り入れられ、自身のルーツを見出していたバスク地方の旋律も用いられる。いっぽう、両端楽章の周到な構成と比して、中間楽章の甘美さが不自然なほど浮いているとも評される。ラヴェルは、性格の異なるさまざまな要素を組み合わせた不均衡の妙を楽しんでいたのかもしれない。

第1楽章 アレグラメンテ、ト長調、2/2拍子、ソナタ形式。意表を突く鞭の一打の後、ピアノの分散和音上でピッコロが第1主題を軽やかに吹き始める。全合奏ののち、テンポをゆるめ、ピアノ独奏が気だるげな第2主題を奏で、オーケストラはおどけた調子でこ

れに応える。展開部ではピアノ独奏が強弱やリズムの濃淡を巧みに駆使しながらカデンツァへと続き、再現部はオーケストレーションを多彩に変化させ高揚感をもたらす。

第2楽章 アダージョ・アッサイ、ホ長調、3/4拍子、3部形式。ピアノ独奏が優しく奏でる主旋律は、管楽器ソロによって継ぎ目なく続けられる。中間部でピアノ独奏が提示する、性格の異なる挿入句で微かなゆらぎをみせた後、再現部ではイングリッシュ・ホルンが主旋律をたっぷりと歌いあげ、ピアノ独奏のトリルで消え入るように終わる。

第3楽章 プレスト、ト長調、2/4拍子。金管楽器の鋭い和音と小太鼓の連打で始まる序奏の後、主部ではトッカータ風に独奏ピアノの平行和音と諧謔的なオーケストラの掛け合いが盛り上がりを見せるも、決して熱狂しすぎぬよう巧みに抑制され、互いに駆け引きを楽しんでいるかのようだ。

作曲年代	1929～1931年
初演	1932年1月14日バリ、サル・ブレイエル。マルグリット・ロンによるピアノ独奏、ラヴェル指揮、ラムルー管弦楽団
楽器編成	フルート1、ピッコロ1、オーボエ1、イングリッシュホルン1、クラリネット1、Esクラリネット1、ファゴット2、ホルン2、トランペット1、トロンボーン1、ティンパニ1、トライアングル、小太鼓、サスペンデッドシンバル、大太鼓、タムタム、ウッドブロック、ムチ、ハープ1、弦楽、ピアノソロ

プロコフィエフ

バレエ組曲「ロメオとジュリエット」(抜粋)

シェークスピアの悲劇に基づく《ロメオとジュリエット》はプロコフィエフの作品の中でもっとも愛されている作品のひとつで、彼の作風の転換期に位置する大作である。アメリカとフランスでの長い亡命生活を経て、プロコフィエフは祖国ソ連への帰還を決意し、約10年間の移行期間の後、1936年に完全帰国を果たした。プロコフィエフは祖国での創作活動を本格化するにあたり、映画や舞台のための作品を精力的に手がける。こうした模索の中、キーロフ劇場の委嘱に応じて1934年12月末に本作品の作曲を思い立ち、振付師ラヴロフスキー、演出家ラドロフの協力により台本を作成、1935年9月8日にピアノ・スコア版が書き上げられた。だが、初演の契約を結んでいたボリショイ劇場の関係者は、試演を聴いて踊りに適さないと判断しただけでなく、結末を悲劇からハッピーエンドに改変したことなども不評を買い、初演の話は立ち消えた。その後、結末を原作通りに戻し、主要な曲を演奏会用組曲にまとめ、1936年に《組曲第1番》、翌年に《第2番》が初演された。これらの演奏で好評を得たうえで、幾度かの修正を施し、1938年にチェコでバレエ版の世界初演、キーロフ劇場ではようやく1940年に初演が叶った。その後1946年に、あらたに《組曲第3番》が発表された。

作品中には登場人物を特徴づける旋律が数多く登場し、とりわけジュリエットには

複数の旋律が与えられている。もうひとりの主人公ロメオ以外にも、修道士ロレンスほか主要人物の性格が活き活きと描かれ、本作の主題であるキャピュレット家とモンタギュー家の対立も、印象的な旋律で表現される。オーケストレーションにも工夫が凝らされ、場面に応じて編成が多彩に変化したり、独奏楽器が活躍するのも魅力のひとつだ。

バレエ音楽版は4幕9場のために全52曲書かれているが、組曲版は物語の進行とは異なる順番で配置されている。今回は指揮者自身の抜粋で、物語上重要な場面を描いた曲に、舞曲を効果的に挿入した構成となっている。

〈モンタギュー家とキャピュレット家〉(組曲2-1)は、両家が牽制しあう不穏な不協和音で幕を開け、荘重な伴奏のもと弦楽器が奏でる付点リズムの旋律と、金管楽器が奏する重々しい旋律は、いずれも本作品を象徴する両家の対立を表わす。〈少女ジュリエット〉(組曲2-2)では、お茶目さ、憧れといった、ロメオと出会う前のジュリエットの無邪気な性格が描かれる。華麗な〈メヌエット〉(組曲1-4)、軽快で陽気な〈仮面〉(組曲1-5)、スラヴ風の〈踊り〉(組曲2-4)と舞曲が3つ続き、活気に満ちた喧騒を描く〈朝の歌〉(組曲3-5)までは軽やかな雰囲気包まれる。〈修道士ロレンス〉(組曲2-3)では、恋人たちの結婚の約束を叶えようとする修道士ロレンスの温厚な人柄が叙情的に描かれる。〈ロメオとジュリエットの別れ〉(組曲2-5)は中盤のクライマックスで、ロメオとジュリエットの心情が切々と訴えかけられ、想いの強さに反して離れ離れになることへの悲壮感があふれる。がらりと雰囲気は変わり、活気に満ちたカーニバルでタランテラが踊られる〈群衆の踊り〉(組曲1-1)、おどけた調子の〈朝の踊り〉(組曲3-2)、メランコリックな〈アンティル諸島から来た娘たちの踊り〉(組曲2-6)と、舞曲が3つ続く。〈タイボルトの死〉(組曲1-7)では、親友マキューシオを殺されたロメオがタイボルトと剣を戦わせる様子が疾走感をもって描かれたのち、ロメオの剣に倒れたタイボルトの葬送が続く。終盤のクライマックスとなる〈ジュリエットの墓の前のロメオ〉(組曲2-7、最後の6小節は省略)と〈ジュリエットの死〉(組曲3-6)は続けて演奏される。冒頭から登場するジュリエットの死を象徴する旋律は楽器の組み合わせを変えて繰り返され、悲痛さを増していく。仮死から目覚めたのち、自死したロメオを追うジュリエットの死の場面では、〈少女ジュリエット〉で登場した旋律が切々と歌われ、最後は穏やかにしめくられる。

作曲年代	1935年夏～1936年春
初演	[バレエ版] 1938年12月30日、チェコスロバキア、ブルノ劇場、ブソタ振付、アルノルディ指揮 [組曲第1番] 1936年11月24日、モスクワ、セバスティアン指揮 [組曲第2番] 1937年4月15日、 レニングラード、作曲者自身の指揮 [組曲第3番] 1946年3月8日、モスクワ、ジェクチャレンコ指揮
楽器編成	フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バスクラリネット1、ファゴット2、 コントラファゴット1、テナー・サクソフォーン1、ホルン4、トランペット3(コルネット1)、トロンボーン3、チューバ1、 ティンパニ1、小太鼓、トライアングル、タンブリン、グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッドシンバル、 大太鼓、シロフォン、マラカス、ウッドブロック、ハープ1、ピアノ1、チェレスタ1、弦楽

N響百年史

Prologue

第二回 一軍楽隊、悔りがたし

片山杜秀

— Morihide Katayama

今年はNHK交響楽団の前身となる新交響楽団結成から九十二年。来るべき創立百周年に向け、今月号から新連載を開始します。NHKFM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点でひもときます。二〇一八／二〇一九シーズンは「Prologue」として、幕末から筆を起し、大正末年になって本格的プロ・オーケストラが誕生するまでの時代の流れを描きます。

今年、2018(平成30)年は「明治150年」という。維新の動乱のさなか、慶応から明治に改元されたのが1868年。そこから満150年ということだ。NHK交響楽団はというと、N響を名乗る前は日本交響楽団、そのまた前は新交響楽団という名称で、新交響楽団の結成年月日は1926(大正15)年10月5日である。明治元年から58年経っている。

したがって「N響100年」は「明治150年」の8年後の2026年。明治のはじまりからN響のはじまりまで58年。近代日本の大都会で、毎月のように定期公演を開いて一般聴衆を広く集めるプロフェッショナルな交響楽団が社会的に必要とされるまで、それだけの歳月を要したと考えればよい。その前には無論、西洋音楽が日本社会にそれなりに染み透っていった長い前史があった。

武州徳丸ヶ原の軍事演習 —— 近代日本と西洋音楽の出会い

するとまず、近代の日本人と西洋音楽はたとえばどのように出会ったのか。1974(昭和49)年のNHK大河ドラマは、子母沢寛^{しもざわかん}原作、渡哲也・松方弘樹主演の『勝海舟』だった(渡が病気で途中降板し、松方に交替した)。音楽は富田勲、テーマ曲の演奏は岩城宏之の指揮するN響。その第2回は「武州徳丸ヶ原」。若き日の勝海舟が、住んでいる江戸の下町を夜に出発し、徳丸ヶ原、現在の東京都板橋区に、徒歩で早朝に間に合うように行く。長崎の町年寄、高島秋帆^{しゅうはん}の指導により開催される、西洋式軍事演習のデモンストレーションを見物するためだ。演習は、最新式の鉄砲や大砲の射撃、それから当時の日本人にはきわめて新鮮な、洋装の歩兵の集団行動を伴って

いた。そのさまが青年勝海舟に衝撃を与える。海舟に西洋への眼を開かせる。子母沢の原作から、軍事演習を一緒に見物した直後の、海舟と彼の剣術の師匠の島田虎之助のやりとりを引こう。

師の虎之助が弟子の海舟に問う。秋帆の演習のどこがすごいと思ったか。海舟は答える。「西洋火術は恐ろしいものだと思います」。師はもっと恐ろしいことがあったらと言う。海舟は思い当たる。馬上から射撃しようとして鉄砲を落とした騎兵がいた。そうしたら後続の騎兵が馬を飛び下り、鉄砲を拾って、落とした騎兵に渡した。個人プレイばかり訓練されている剣術道場とはまるで違う。驚くほど機敏な集団行動の世界がそこにはあった。

師の虎之助は、この海舟の指摘を「我が意を得たり」と喜ぶ。そして言う。「あの演習に一貫しているものは、悉く総体だということだ。一人々々ではないのだ。洋式演習の根本は百人を一人とし、千人万人を只一人とするとこ

ろにあるのだ」

ではなぜ、騎兵も歩兵も砲兵も有機的に組み合わせられた無駄のない集団プレイができるのか。そこまで訓練が行き届いているのか。大人数のコンビネーションのテンポとリズムを、高島秋帆の門下生たちはどうやってから



高島秋帆徳丸ヶ原演習図(長崎歴史文化博物館蔵)

だに覚えさせているのか。子母沢の原作にはあまり言及がないのだが、音楽の力であろう。秋帆といえば、西洋の鼓笛楽の導入者としても音楽史に名が刻まれている。声による号令や視覚的合図も重要だが、それでは広域に展開する軍隊には行き届かない。細かなリズムもとれない。笛と太鼓、特に太鼓である。西洋の近代軍隊の訓練は音楽と結び付いており、秋帆はそれを長崎で学び、導入した。

小太鼓は英語ではミリタリー・ドラムともいう。軍隊の訓練用の太鼓としてお馴染みだからだ。太鼓はオーケストラの指揮に相当し、太鼓に合わせて歩兵や騎兵や砲兵が統一的にアンサンブルをなすことは、指揮者に合わせて弦楽器や管楽器や打楽器が合奏することと同一性がある。軍隊でも大部隊が野外で大行進するとなったら、小太鼓や鼓笛楽では追いつかない。といっても弦楽器は野外に向かないので、編成は管楽器と打楽器になる。プラス・バンド、ウィンド・アンサンブル、シンフォニック・バンド、ウィンド・オーケストラなど、さまざまに呼称される一種のオーケストラがここに誕生してくる。組織を動かす必要がオーケストラを生む。

高島秋帆のときはまだ初歩的な鼓笛楽であって、オーケストラと呼ぶには程遠い。だが、近代日本における西洋音楽やオーケストラの歴史を考えると、武州徳丸ヶ原がやはりひとつの原体験として挙げられると思う。西洋式軍事訓練のデモンストレーションが音楽込みで行われ、100人規模の集団が機能的に運動する快感を日本人に教える、大いなるきっかけになったのだから。

では、その徳丸ヶ原の演習とはいったい何か。NHK大河ドラマ『勝海舟』では、「武州徳丸ヶ原」が1月放送の第2回で、「黒船渡来」は3月放送の第11回だった。ペリー提督率い

るアメリカ艦隊が日本を開国させようと浦賀に
来航するのは、高島秋帆の演習の9回も先。
徳丸ヶ原の演習は1841(天保12)年で、ペリー
来航の12年前だ。老中が水野忠邦の頃。時
代劇の『遠山の金さん』の時代。そのとき、日
本人はもう近代西洋音楽とそれなりの仕方で
出会っていた。芸術音楽としてではなく、集団
訓練に不可欠な実用音楽として。ちなみに徳
丸ヶ原は今日では高島^{ちな}平と呼ばれている。高
島秋帆に因むといわれる。

オーケストラ音楽への入口だった 軍楽隊

そのあと、軍隊のための実用音楽としての
西洋音楽は、幕末の日本に広く浸透した。幕
府も諸藩も西洋式の軍事訓練を行うようにな
り、そこに鼓笛楽が伴っていったからである。

戊辰戦争(1868~1869)の際の朝廷軍は、名
の伝わらぬ日本人の作曲といわれる《維新
マーチ》に乗って、東海道等を隊列を組んで
行進した。明治維新政府が成立すると、陸海
軍も創建され、そこには当然、軍楽隊が設置
された。規模は鼓笛楽からブラス・バンド、ウ
ィンド・アンサンブルへと拡充していった。

海軍軍楽隊は、薩摩藩の軍楽隊を土台と
して編成され、指導者には最初、イギリス人の
フェントン²を招いた。生麦事件(1862)と薩英
戦争(1863)以来のイギリスと薩摩のつながり
がそういう選択をさせ、海軍軍楽隊もイギリス
式になった。だが、フェントンを継いだのはドイ
ツ人のエッケルト³で、それにより海軍軍楽隊は
楽器編成から作編曲のスタイルまでドイツ式と
なって、第2次世界大戦に日本が敗北し軍楽
隊が解体されるまでそのままだった。海軍軍
楽隊を象徴する楽曲といえば、エッケルトの弟



フェントンの指導で結成された薩摩藩軍楽隊(1870年6月18日) | 提供:ジャパン・アーカイブズ

子の軍楽隊員、瀬戸口藤吉⁴が作曲した《軍艦行進曲》(1900)だが、それが多分にドイツ風のマーチなのには十分な理由がある。

一方、陸軍軍楽隊は、幕末の日本の洋式陸軍訓練に最も影響を与えたのがフランス陸軍であったがゆえに、万事フランス式となり、初期の指導者にもフランス人のルルー⁵が招かれた。明治のはじめには軍楽隊にかぎらず陸軍全体がフランスを模範にしていたが、普仏戦争(1870~1871)でフランス陸軍がドイツ陸軍に敗れた衝撃から、陸軍首脳はフランスからドイツに次第に宗旨替えをしていく。だが、軍楽隊はその影響を受けず、1945(昭和20)年までフランス式のままだった。大正・昭和初期にフランクやダンディやドビュッシーの音楽に憧れた作曲家の卵たちは、陸軍軍楽隊系の音楽家に師事することを慣例とした。パリ留学の入門編のような教育を受けられたのである。

ところで、軍楽隊というと吹奏楽のイメージを持たれるだろうし、それはかなり当たっているが、正解ではない。隊員は管楽器や打楽器のほかに声楽の訓練も受けたし、日露戦争(1904~1905)後には弦楽器も演奏するようになった。大正時代の陸海軍の軍楽隊はどちらも交響楽団化し、軍隊内にとどまらず、一般市民向けにコンサートを催すこともあった。軍楽隊の機能にも、当初の実用的な行進曲演奏ばかりではなく、軍人兵士の慰安、国民への軍の存在意義の宣伝などが付け加わり、レパートリーも、ワルツやポルカ、オペラの序曲やバレエ音楽、ついにはシンフォニー全曲演奏と、拡大の一途をたどった。

N響はオーケストラを知らない日本人の前

にいきなり大正末期に現れたのではない。大正期には、少なくとも都会の日本人なら、いろいろなオーケストラを生で聴く機会がもてていた。そのひとつの太い幹を担っていたのはベリ来航以前からの軍楽の系譜だった。N響の団員にも戦後まで軍楽隊出身者が幾人もいた。軍楽隊、悔りがたし。

注

1. 子母沢寛(1892~1968)。小説家。『新選組始末記』をはじめとする「新選組三部作」ほかで知られる。
2. ジョン・ウィリアム・フェントン(John William Fenton, 1831~1890)。イギリスの音楽家。1869年から薩摩藩の軍楽の指導を行う。《君が代》の最初のバージョンを作曲したが普及しなかった。
3. フランツ・エックルト(Franz Eckert, 1852~1916)。ドイツ(プロイセン)の音楽家。1879年来日。1880年、奥好義と林廣守が作曲した《君が代》に西洋風和声を付けた。
4. 瀬戸口藤吉(1868~1941)。日本の作曲家。《軍艦行進曲》や《愛国行進曲》などを作曲し、「日本行進曲の父」とよばれる。
5. シャルル・ルルー(Charles Leroux, 1851~1926)。フランスの音楽家。1884年来日。日本陸軍軍楽隊に西洋式の音楽教育を行い、その演奏水準を飛躍的に向上させるにとどまらず、日本への西洋音楽の普及に尽力した。《扶桑歌》《抜刀隊》《陸軍分列行進曲》の作曲者としても知られる。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。著書に『音盤考現学』『音楽博物誌』『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『五箇条の誓文』で解く日本史』ほか多数。

次回予告

次回(2019年2月号掲載予定)は宮内省楽部と東京音楽学校(現・東京藝術大学音楽学部)を取り上げ、近代日本における西洋音楽黎明期を描きます。

Overview

12月定期公演

3人のマエストロの個性が光る 季節感を楽しむ滋味豊かなプログラム

12月のAプロを指揮するのはロシアのアレクサンドル・ヴェデルニコフ。ロシア音楽の隠れた名曲に焦点を当てる魅力的なプログラムが組まれた。スヴィリドフはショスタコーヴィチに師事した作曲家。《組曲「吹雪」》は映画音楽由来の作品だけに、明快で親しみやすい。スクリャービンの《ピアノ協奏曲》は作曲者が20代の時の意欲

作。後年の作風を予感させる官能性を漂わせつつも、いまだショパンの影響を色濃く残す。ピアノ独奏のアンドレイ・コロベニコフは法律家の資格を持つ異才。グラズノフの《交響曲第7番「田園」》は、ベートーヴェンへのオマージュのようなロシア流の田園交響曲だ。

Bプロは巨匠ウラディーミル・フェドセーエフが登場する。ロシアの真髄を聴かせるマエストロが選んだのはチャイコフスキーの《バレエ音楽「くるみ割り人形」》全曲。組曲版ではなく全曲版を聴くことで、純然たる音楽作品としての《くるみ割り人形》の奥深さに触れることができそうだ。

Cプロはトーマス・ヘンゲルブロックが客演する。パリ管弦楽団のアソシエート・コンダクターとして活躍する名指揮者だが、もともとは古楽のスペシャリスト。自身が設立したバルタザール・ノイマン合唱団と共演するバッハの《マニフィカト》は、大きな聴きものとなる。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

12/1 **土** 6:00pm

12/2 **日** 3:00pm

NHKホール

スヴィリドフ／組曲「吹雪」—プーシキン原作の映画から
スクリャービン／ピアノ協奏曲 嬰へ短調 作品20
グラズノフ／交響曲 第7番 へ長調 作品77「田園」

指揮：アレクサンドル・ヴェデルニコフ
ピアノ：アンドレイ・コロベニコフ

B

12/12 **水** 7:00pm

12/13 **木** 7:00pm

サントリーホール

チャイコフスキー／バレエ音楽「くるみ割り人形」作品71

指揮：ウラディーミル・フェドセーエフ
児童合唱：NHK 東京児童合唱団

C

12/7 **金** 7:00pm

12/8 **土** 3:00pm

NHKホール

バッハ／組曲 第4番 二長調 BWV1069

バッハ（シェーンベルク編）／前奏曲とフーガ 変ホ長調 BWV552「聖アン」

バッハ／マニフィカト（クリスマス版）

指揮：トーマス・ヘンゲルブロック
合唱：バルタザール・ノイマン合唱団

A

Concert No.1899 NHK Hall

November

24(Sat) 6:00pm

25(Sun) 3:00pm

conductor | Junichi Hirokami

organ | Masato Suzuki

concertmaster (guest) | Kei Shirai*

◆**Kei Shirai:** Kei Shirai was born in Trinidad and Tobago in 1983, and studied music at the Music High School Attached to the Faculty of Music, Tokyo University of the Arts, and Tokyo University of the Arts. He went to Vienna in 2007 for further studies at the Universität für Musik und darstellende Kunst Wien, and then became a contract member of the Wiener Staatsopernorchester. Since leaving the orchestra, he has been invited to perform as guest concertmaster by orchestras both at home and abroad including the Czech Philharmonic Orchestra and WDR Sinfonieorchester Köln.

Samuel Barber

Music for a Scene from Shelley
op.7 [10']

Aaron Copland

Symphony for Organ and Orchestra
[25']

- I Prelude: Andante
- II Scherzo: Allegro molto-Moderato
- III Finale: Lento-Più mosso (Allegro moderato)

— intermission —

Charles Ives

Symphony No.2 [35']

- I Andante moderato
- II Allegro molto (con spirito)
- III Adagio cantabile
- IV Lento maestoso
- V Allegro molto vivace

Artist Profiles**Junichi Hirokami, conductor**

Tokyo-born Junichi Hirokami won the first Kondrashin International Conducting Competition in Amsterdam in 1984, and started his career internationally by guest conducting world renowned orchestras such as the Royal Concertgebouw Orchestra, the Israel Philharmonic Orchestra and the London Symphony Orchestra. He served as Principal Conductor of the Norrköping Symphony Orchestra of

Sweden from 1991 to 1995, Chief Conductor of the Limburg Symphony Orchestra based in Maastricht, Netherlands from 1998 to 2000, Principal Guest Conductor of the

A

24 & 25. NOV. 2018

Royal Liverpool Philharmonic Orchestra from 1997 to 2001, and Music Director of the Columbus Symphony Orchestra from 2006 to 2008. In Japan, he was Principal Conductor of the Japan Philharmonic Orchestra from 1991 to 2000. He is also highly acclaimed for conducting operatic performances, particularly Verdi's *Un ballo in maschera*, which he performed at the Sydney Opera House. He also conducted *La traviata* at Tokyo's New National Theatre. Along with the Kyoto Symphony Orchestra, he was awarded the Suntory Music Award from the Suntory Foundation for Arts in 2015, and received the 36th NHK Symphony Arima Prize in 2016. Currently, he is Chief Conductor and Music Advisor of the Kyoto Symphony Orchestra and Friendship Guest Conductor of the Sapporo Symphony Orchestra. He also serves as professor of conducting at Tokyo College of Music. He is highly regarded for his passionate style of conducting.

A

24 & 25. NOV. 2018

Masato Suzuki, organ



© Maso Boggs

Masato Suzuki has been displaying his ingenuity in a wide range of fields from performances of harpsichord, organ and piano, to conducting, composing and producing. He was born in The Hague in 1981, and studied composition at Tokyo University of the Arts and early music at the postgraduate level of the same university. He went on to study organ at the Royal Conservatory in The Hague,

graduating at the top of the class, and improvisation, graduating with honors. He also studied harpsichord at the Amsterdam Conservatory. In addition to performing solo and chamber music, he has been energetically engaged in performing with and conducting the Bach Collegium Japan, of which he assumed the post of Principal Conductor in autumn of 2018. He displays his flexible sensitivity not only with music from the Renaissance to the Baroque periods, which are his forte, but also with contemporary works including his own compositions. Monteverdi's *L'incoronazione di Poppea*, which he conducted in November 2017, won artistic acclaim. He performs a wide range of programs from Baroque to contemporary using original instruments with the Ensemble Genesis, where he serves as Music Director, and actively incorporates dancing and visuals into his performances. He is versatile, serving as Executive Producer of the Chofu International Music Festival, composing works and overseeing stage direction. He is also a church organist both in Japan and the Netherlands.

[Junichi Hirokami by Takuya Katagiri, music journalist, Masato Suzuki by Takaakira Aosawa, music critic]

Samuel Barber (1910–1981)

Music for a Scene from Shelley op.7

The American composer Samuel Barber was born in West Chester, Pennsylvania. He received his first piano lesson at six, wrote his first composition at seven, and attempted to write his first opera, *The Rose Tree*, at ten. Barber soon became a paid musician; he became a local church organist at twelve. Then, at the age of fourteen, he entered the Curtis Institute of Music, newly founded in Philadelphia in 1924. As a talented student, Barber studied the piano, conducting (with the world-renowned Fritz Reiner), and voice performance. Barber's voice was so appealing to many that he once thought of becoming a professional singer. Despite all his talents, however, he was always fascinated with writing his own music and decided to become a composer. Even during his college years, he wrote Violin Sonata, Op. 4 (1928) and Overture to *The School for Scandal*, Op. 5 (1931), the latter being his first orchestral piece written at the age of twenty-one. Both of these early works were highly acclaimed within and outside the university community.

Music critics praised Barber's music, which was subsequently awarded composition prizes and scholarships, including the 1935 American Grand Prix de Rome and Pulitzer traveling scholarship. Funding from these awards enabled Barber to travel to Europe in 1935 and 1936 and to study at the American Academy of Rome. During his residency at the academy, he produced such masterpieces as Symphony No. 1, Op. 9 (1935–36), and String Quartet, Op. 11 (1936), the second movement of which was later arranged for string orchestra and was titled the *Adagio for Strings* (1937), premiered by the NBC Symphony Orchestra under the direction of the Italian maestro Arturo Toscanini.

Music for a Scene from Shelly for Orchestra, Op. 7, was written in the summer of 1933, when the composer traveled to Italy for his general education. During his stay in the village of Cadegliano with his friend Gian Carlo Menotti, Barber, an avid reader of the great classics, read *Prometheus Unbound*, a four-act lyrical drama written by the nineteenth-century Romantic British poet Percy B. Shelley. In this drama the Titan, Prometheus, was chained to a mountain by Zeus for stealing fire from the gods to enlighten mortals. According to the composer, the piece tries to express “the ‘voices in the air’ imploring Asia (goddess of love) to bring back sympathy and love to mankind through Prometheus’s release.”

This tone poem displays Barber's skill in orchestration, providing a mysterious aura at the beginning. The piece also demonstrates the composer's ability to create a cohesive musical narrative, suggestive of a story. The piece furthermore demonstrates Barber's capability of building compelling drama using all possible musical means, including effective dynamics and intricate harmonies, leading to a poignant climax at the end.

Aaron Copland (1900–1990)

Symphony for Organ and Orchestra

Aaron Copland was born in Brooklyn, New York. His parents, Russian-Jewish emigrants, were not musical, but Copland was able to acquire basic enough musical skills to compose his first song at the age of eight. When he was eleven years old, Copland

wrote an opera scenario and named it *Zenatello*. Furthermore, Copland took piano lessons with local teachers and studied composition with Rubin Goldmark, from 1917 and 1921. Goldmark's teaching, however, seemed too conservative for him, as he wished to create more sophisticated and modern-sounding music. Using his private funds, the prospective American composer sailed to France in 1921 to study abroad. He went to Fontainebleau, outside of Paris, where a new conservatory for young American musicians was established. Days in Fontainebleau was a bore to Copland, however, as he found the class too fundamental, but he was able to meet Nadia Boulanger, one of the most important composition teachers of the twentieth century. Copland eventually studied with her for three years in Paris.

Paris gave Copland various stimuli. Boulanger's vigorous lessons substantially improved Copland's compositional skills; she also helped the young American's music to be published. The city of Paris was filled with art and literature. Copland met writers, painters, and musicians actively participating in the recent trends in various modern art movements.

In the spring of 1923, just before Copland's return to the United States, Boulanger took him to meet the Russian-born conductor Serge Koussevitzky. As Koussevitzky frequently programed new compositions by his contemporaries, it was a great advantage for Copland to know the maestro. Furthermore, Koussevitzky was about to become the conductor of the Boston Symphony Orchestra in the United States. Knowing that Copland would soon finish his studies in Paris and return to his homeland, Koussevitzky asked the young American to write a new piece for orchestra with Nadia Boulanger in mind (she was also an accomplished organist). Boulanger subsequently asked the conductor Walter Damrosch to premiere this new piece because she would make her American debut with Damrosch, who was actually conducting the New York Symphony Orchestra before Boulanger would travel to Boston.

Copland thus wrote his *Symphony for Organ and Orchestra* in 1924, making his debut as a major creator of serious music. Today, his musical is largely considered quintessentially American with accessible sounds and lively rhythmic impulses, often using folk materials from the composer's native land. This symphony, however, was written before Copland finally came into his own more popular musical language in the 1930s and 1940s. The audience would hear angular melodies and dissonant harmonies, not so often used in his later works. However, powerful and often irregular rhythm appearing in all three movements is typical of Copland's music.

Charles Ives (1874–1954)

Symphony No.2

The American composer Charles Ives was born in Danbury, Connecticut. It was a small town but rapidly industrialized in the late nineteenth century. Charles was a son of George Ives who used to be a U. S. Army band leader during the Civil War. After the War, George led a local marching band and taught his son the piano, the organ, the cornet, and the fundamentals of practical music theory. George's musical teachings were revolutionary in some sense. For example, he encouraged Charles to sing in one key and accompany the voice on piano in a different key. He did not stop Charles banging on the piano as long as the child knew what he was doing. George also insisted that music was not just about

beautiful sounds; for him, enthusiastic singing of town folks, no matter how badly out-of-tune, was an important form of music making. His father's such visionary views on music strongly influenced the young Charles Ives.

Ives became a church organist at the age of fourteen and wrote some hymns and songs for church services, including *Variations on "America"* for organ. With his father's encouragement, Ives entered Yale University in 1894 and studied music theory and composition with Horatio Parker. Parker was a stern, German-trained composer who gave Charles formal training in harmony and counterpoint. Ives wrote about eighty works during his four years in college, including church music, organ pieces, songs, and his String Quartet No. 1 (1896). Most of his works were conservative, but he attempted to go beyond the established conventions of European art music. He once brought an orchestral piece whose melody was written in eight different keys. His composition teacher Parker dismissed Ives' such an attempt as a joke.

After graduating from Yale, Ives spent most of his life working as an insurance executive. He composed during evenings and weekends. By doing so, Ives was able to compose as he wished. He especially liked to use various elements from vernacular music such as American folksongs, patriotic songs, and church hymns, all of which were frequently sung by his father and the people of his hometown Danbury. Ives also utilized techniques and forms of European serious music that Parker taught at Yale. By combining these vernacular and art-music traditions, Ives created his very own music, which sounded a bit unusual and was not understood or appreciated immediately by the general public. Accordingly, his music was largely ignored and rarely performed for a long time. One of Ives' first pieces to capture the public's imagination was his Second Symphony (1902). Leonard Bernstein and the New York Philharmonic gave the world-premiere broadcast performance of the symphony in 1951, almost fifty years after the piece was completed. At the end of the concert, the audience applauded wildly. Ives listened to the radio broadcast at home, and when he heard the audience's enthusiastic response, the seventy-seven-year-old Ives danced around his kitchen table.

A

24 & 25. NOV. 2018

Akihiro Taniguchi

Professor at the Ferris University in Yokohama, Japan. He published two books on Disney film music and currently works on a book on twentieth-century American classical music.

PROGRAM

B**Concert No.1898 Suntory Hall****November****14(Wed) 7:00pm****15(Thu) 7:00pm**

conductor | **Gianandrea Nosedà**cello | **Narek Hakhnazaryan**concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

Ottorino Respighi**“Antiche danze ed arie per liuto”,
set 1 [15']**

I Il conte Orlando

II Gagliarda

III Villanella

IV Passo mezzo e mascherada

Franz Joseph Haydn**Cello Concerto No.1 C major
Hob.VIIb-1 [24']**

I Moderato

II Adagio

III Finale: Allegro molto

— intermission —

Sergei Rakhmaninov**Symphonic Dances op.45 [35']**

I Non Allegro

II Andante con moto (Tempo di Valse)

III Lento assai—Allegro vivace

Artist Profiles

Gianandrea Nosedà, conductor

Born in Milan in 1964, Gianandrea Nosedà studied conducting in his hometown. In 1994, he won the Cadaqués Orchestra International Conducting Competition. A key moment in his career came in 1997, when he was named Principal Conductor of the Cadaqués Orchestra, a position he has held to date. He also served as Principal Conductor of the BBC Philharmonic from 2002 to 2011, and he has held the positions of Chief Guest Conductor of the Rotterdam Philharmonic Orchestra, the London Symphony Orchestra and the Pittsburgh Symphony Orchestra, to name a few. From the 2017/18 season, he assumed the position of Music Director of the National Symphony Orchestra based in Washington, D.C. He has contributed greatly to giving Italian works of the 20th Century more public exposure, including those by Respighi and Casella and orchestral

works by Liszt and Rakhmaninov. Another key moment in his career in 1997 was in the world of opera, where he was named Principal Guest Conductor of the prestigious Mariinsky Theatre in St. Petersburg. In 2007, he assumed the position of Music Director of the Teatro Regio di Torino. He made his debut with the Metropolitan Opera in 2002 and at the Salzburger Festspiel in 2015 by conducting an operatic work. And he has been designated as General Music Director of the Zürich Opera from the 2021/22 season. He has worked with the NHK Symphony Orchestra many times since his first appearance in 2005.

Narek Hakhnazaryan, cello



Narek Hakhnazaryan was born to a music family in Yerevan, Armenia in 1988. He was mentored by Mstislav Rostropovich, and studied at the Moscow Conservatory under Alexey Seleznyov and at the New England Conservatory under Laurence Lesser. He won first prize at the 2006 Aram Khachaturian International Competition in Armenia, and after winning first prize at the International Auditions of the Young Concert Artists in 2008, he made his debut at New York's Carnegie Hall. He garnered international attention after winning the gold medal for cello at the 2011 International Tchaikovsky Competition. He was selected as a BBC New Generation Artist in 2014, and played Haydn Cello Concerto No.1 in the BBC Proms in 2016. He has worked with the Orchestre de Paris, the London Symphony Orchestra, the Mariinsky Orchestra and the Chicago Symphony Orchestra, among others. With the NHK Symphony Orchestra, he worked as its soloist for Shostakovich Cello Concerto No.1 in their first collaboration in January 2016. Russian music is his forte, but he actively challenges German repertoires as well as contemporary pieces. He plays the 1707 Joseph Guarneri cello.

[Gianandrea Noseda by Atsuya Funaki, music critic, Narek Hakhnazaryan by Haruo Yamada, music critic]

Program Notes | Akihiro Taniguchi

Ottorino Respighi (1879–1936)

“Antiche danze ed arie per liuto”, set 1

The Italian composer Ottorino Respighi was born in a musical family. He studied the violin, the viola, and composition at the Liceo Musicale in Bologna. The young musician also studied history with Luigi Torchi, a scholar of early music. Upon graduation with a diploma in the violin, in 1899, Respighi became the principal violist with the orchestra of the Russian Imperial Theatre in St. Petersburg, where he met Russian composer Rimsky-Korsakov, whose orchestra writing greatly influenced the young Italian. In 1913, Respighi was appointed professor of composition at the Conservatorio di Santa Cecilia in Rome. He held this position for the rest of his life.

B

14 & 15 NOV 2018

Respighi's music is characterized by the use of illustrious combinations of instruments, its intricate expression and harmony inherited from the twentieth-century impressionist French composers such as Debussy. This is especially applicable to a series of his tone poems titled "Roman Trilogy," consisting of the *Fontane di Roma* (1916), *Pini di Roma* (1924), and *Feste Romane* (1928). Although he was a twentieth-century composer and eager to cultivate a new way of composing, Respighi had a strong interest in early music, namely European music of the Middle Ages (500–1400), Renaissance (1400–1600), and Baroque (1600–1760). His three *Antiche danze ed arie* (*Ancient Airs and Dances*) Suites display such traits. The impetus for writing them came after his encounter with sixteenth- and seventeenth-century dances and airs written for the lute. The lute is a plucked instrument, an ancestor of the guitar, popularly played in Renaissance Europe. The music for this instrument was written in a peculiar style of notation that Respighi was unable to decipher. Therefore, he consulted an edition in modern (regular) notation prepared by the Italian musicologist Oscar Chilesotti.

Respighi selected four lute pieces to make three orchestral suites; he re-harmonized and orchestrated the original pieces with modern taste. The first suite for chamber orchestra was composed in 1917, a few months after the successful premiere of the *Fontane di Roma*. The suite's enthusiastic reception prompted the composer to write two more suites: the second suite for symphony orchestra, written for the Cincinnati Orchestra under Fritz Reiner (premiered 7 March, 1924) and the third suite for string orchestra (premiered in the Sala Verdi of Milan Conservatory, January 1931) performed under the baton of the composer.

Suite No. 1 opens with Balletto: *Il Conte Orlando* published in 1599 by composer Simone Molinaro. The second section comes from Gagliarda (a type of dance, also known as a galliard) by Vincenzo Galilei. The third comes from Villanella (a street song) by an unknown composer, and the finale comes from *Passo mezzo e mascherada* also by an unknown composer.

Franz Joseph Haydn (1732–1809)

Cello Concerto No.1 C major Hob.VIIb-1

The eighteenth century Austrian composer Franz Joseph Haydn is known today as one of the Viennese "classicist" composers, along with Mozart and Beethoven. They are so called because they all, in some ways, established and formulated such music genres and forms as symphonies, keyboard sonatas, and string quartets. Haydn, the eldest of the three, was a child prodigy especially in singing as he was invited to a church choir at the age of five, but he also studied keyboard instruments and the violin at the same time. As his voice changed, Haydn was discharged from the church choir at the age of seventeen. Haydn had to support himself by teaching and playing violin, while studying harmony and counterpoint. Soon after this hard time, Haydn was hired as an assistant to the Italian composer Nicola Porpora in exchange for lessons, and in 1761 he became a court musician at the palace of the Esterházy family (appointed assistant conductor in 1761 and became the music director in 1766). The Esterházys were one of the richest and most influential families of the Austrian Empire and were famous for housing its private orchestra with highly trained musicians. During his almost thirty-year service to the aristocratic family, Haydn provided music of all genres, including operas, music for church services, symphonies, string quartets, and keyboard sonatas.

His first cello concerto was written probably between the years 1761 to 1765, during this time as a court musician in the Esterházy orchestra. The piece was written for Joseph Weigl, a cellist in the court orchestra, which premiered the concerto probably under the direction of

Haydn himself. The manuscript was presumed lost for two hundred years until 1961, when Czech musicologist Oldřich Pulkert found a copy of the score in the Radenin collection at the Prague National Museum. The rediscovered cello concerto was first performed on 19 May, 1962 in Prague, with the soloist Miloš Sádlo and Czech Radio Symphony under the direction of Charles Mackerras.

The concerto is in three movements: the vibrant first movement (Moderato), the graciously elegant second movement (Adagio), and the breathlessly exciting third movement (Allegro molto).

Sergei Rakhmaninov (1873–1943)

Symphonic Dances op.45

Sergei Rakhmaninov was one of the best pianists of his age, but he is remembered primarily as a composer of twentieth century Russia (or the Soviet Union). His music is firmly based on his native country's life and culture, often incorporating elements from folksongs and religious music.

Born into an aristocrat family, Rakhmaninov began studying piano at four. He attended the Moscow Conservatory, studied the piano and composition, wrote piano and orchestra pieces, and graduated in 1892. The negative reception of his first symphony of 1897 depressed him severely, but his 1901 Piano Concerto No. 2 was a triumph. In 1917, following the Russian Revolution, Rakhmaninov emigrated to the United States. Since he left his family and financial property behind, he decided to become a professional concert pianist to support himself. At forty-five, Rakhmaninov was already widely known as a pianist-composer, but he needed to broaden his piano repertoire to appeal to a wider audience. Having spent most of his time practicing and performing the piano, Rakhmaninov's composing activities were limited. He nevertheless wrote six pieces, including Symphony No. 3 (1936) and the famous *Rhapsody on a Theme of Paganini* Op. 43 (1934), as well as the *Symphonic Dances*. Regardless of his efforts, however, American critics did not appreciate his music much; for them, Rakhmaninov was a retrograde Romanticist, not a modernist they were looking after.

Written for a large orchestra, *Symphonic Dances* of 1940 is Rakhmaninov's last completed work. It was written in a cottage on Long Island, New York. As the title suggests, this work is a set of three dances. Initially, Rakhmaninov named the piece *Fantastic Dances* and gave each movement a title: "Noon," "Twilight," and "Midnight." Rakhmaninov also thought of calling the three-movement piece simply *Dances* but such title would have given the audience an impression that he wrote dance music for jazz orchestra. Rakhmaninov eventually discarded all these ideas and settled on the more objective name: *Symphonic Dances*.

On the other hand, Rakhmaninov did enjoy listening to the sound of jazz orchestra, when he heard the 1924 world premiere of George Gershwin's *Rhapsody in Blue* in New York. Fascinated with Gershwin's attempt to integrate European art music and American jazz, Rakhmaninov tried to incorporate some elements of jazz into his own compositions. The first of the three dances, for example, features a saxophone solo and the third features syncopated rhythm. There are some other noteworthy markers in this work. First, in the first dance, Rakhmaninov borrowed material from his own First Symphony, making this piece self-referential. Second, he quoted, in the third dance, a plainchant titled *Dies Irae*, usually sung at a Catholic Requiem Mass. The chant also appears in his earlier compositions such as the *Paganini Rhapsody* mentioned above, and the Second (1908) and Third (1936) Symphonies.

Akihiro Taniguchi | For a profile of Akihiro Taniguchi, see p.47

PROGRAM

C

Concert No.1897 **NHK Hall**

November

9(Fri) 7:00pm

10(Sat) 3:00pm

conductor | **Gianandrea Noseda** | for a profile of Gianandrea Noseda, see p.48

piano | **Alice Sara Ott**

concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

Maurice Ravel

Piano Concerto G major [22']

I Allegremente

II Adagio assai

III Presto

— intermission —

Sergei Prokofiev

**“Romeo and Juliet”, ballet suites
(excerpts) [56']**

The Montagues and the Capulets (Suite 2 No.1)

Juliet-The Young Girl (Suite 2 No. 2)

Minuet (Suite 1 No. 4)

Masks (Suite 1 No. 5)

Dance (Suite 2 No. 4)

Morning Serenade (Suite 3 No. 5)

Friar Laurence (Suite 2 No. 3)

Romeo and Juliet's before Parting (Suite 2 No. 5)

Folk Dance (Suite 1 No. 1)

Morning Dance (Suite 3 No. 2)

Dance of the Maids from the Antilles (Suite 2 No. 6)

Death of Tybalt (Suite 1 No. 7)

Romeo at Juliet's Grave (Suite 2 No. 7)

The Death of Juliet (Suite 3 No. 6)

Artist Profile

Alice Sara Ott, piano



c. Jochen Becker

German-Japanese pianist Alice Sara Ott was brought up in Munich and studied at the Mozarteum University Salzburg. She has won numerous top prizes in piano competitions held in Europe, and has signed an exclusive recording contract with a major German label. Until now, She has worked with many world-renowned conductors such as Lorin Maazel, Paavo Järvi and Gustavo Dudamel, as well as

world leading orchestras. Apart from her music career, she has displayed her multiple talents by entering into a design partnership with a premium German travel bag brand, which has helped spread her appeal to a wider age group. She first appeared with the NHK Symphony

Orchestra under the baton of Lorin Maazel in 2012, and in 2015, she played Beethoven Piano Concerto No.3 on the orchestra's tour of northern Japan, where it performed in four cities of Hokkaido, as well as in Aomori and Fukushima prefectures and Tokyo.

[Alice Sara Ott by Haruka Kosaka, music journalist]

Program Notes | Akihiro Taniguchi

Maurice Ravel (1875–1937)

Piano Concerto G major

Maurice Ravel was born in the Basque Country, a region that spans the France-Spain border, famous from its distinctive culture and language. His family, however, soon moved to Paris, where he spent most of his time. At the age of fourteen, he entered the Paris Conservatoire, the most prestigious institute of music in France, and studied piano with Eugène Anthoine. Ravel also studied composition with Gabriel Fauré, one of the most prominent nineteenth century French composers, with whom Ravel developed his creative skills and sharpened his artistry. After graduating from the Conservatoire, he absorbed the latest music trends in Paris and composed such masterpieces as *Sonatine* (1903-1905), *Piano Trio* (1914), and the ballet *Daphnis et Chloé* (1912).

In 1928, Ravel traveled to the United States and stayed for four months. He conducted his own orchestral works in thirty-one concerts, receiving enthusiastic public acclaim. Furthermore, while in America, Ravel encountered the new, emerging music called jazz, whose energetic rhythms excited the Frenchman. In New York, he met the young George Gershwin, a Broadway songwriter and the composer of the *Rhapsody in Blue*, a piece of “Symphonic jazz” written four years prior to Ravel’s arrival in the city. Ravel’s influence from American jazz was apparent in such pieces as the *Violin Sonata* (1922-1927) and the *Piano Concerto in G-major*. Happy with the success of his U. S. concert tour, Ravel planned a return visit. He started composing a new piano concerto with which he would be touring around big cities, appearing as the soloist and the conductor of his music. While writing the concerto, however, Ravel was commissioned another piano concerto by the Austrian Paul Wittgenstein, who lost his right arm during World War I. Ravel discontinued the G-major Concerto for a while and worked on the new *Piano Concerto for Left Hand*. Upon completing the *Left Hand Concerto*, the composer went back to the G-major concerto and completed it in 1931.

Ravel has been considered a modernist. His music uses sophisticated and intricate harmonies. Many people relate such harmonic language with that of the twentieth century impressionist composer Debussy. Additionally, Ravel’s sensitive but eloquent use of orchestral color is unparalleled. On the other hand, Ravel has been considered classicist, due to his adherence to fresh and crisp melodies and clear-cut forms, both typical of master composers of the eighteenth century.

The *Piano Concerto in G-major* is in three movements. The first movement opens with a whip-crack, followed by a theme played by the piccolo. The second movement is a quiet, serene waltz. The finale is characterized by the perpetual motion figuration on the piano at the beginning; the whole piece ends with a big thump in the bass drum.

C

9 & 10, NOV. 2018

“Romeo and Juliet”, ballet suites (excerpts)

Sergei Prokofiev was born into a family of agriculturists in Ukraine. Fascinated by his mother’s piano playing of Chopin and Beethoven, the child was captivated by the power of music. His mother, Maria, gave Sergei his first music lessons and arranged trips to the opera in Moscow. The young Prokofiev was inspired by the Russian composer Glière, who came to stay at Prokofiev’s home town in the summer to teach him theory and composition. With Glière’s help in musical skills, Prokofiev entered the conservatory of St. Petersburg in 1904. Upon graduation with the Anton Rubinstein Prize in piano performance, Prokofiev’s talent flourished further: he gave his first piano recital in 1908 and made his first appearances as a composer in 1911 and 1912. As a composer, Prokofiev was competent enough to get a contract with the music publisher Boris P. Jurgenson. The 1917 Russian Revolution made Prokofiev’s musical activities difficult, and he had to look for opportunities abroad. First Prokofiev went to the United States, where he succeeded as a pianist and an opera composer. He then moved to France, writing modern ballet music. Around that time, the Soviet Union made some attempts to bring Prokofiev back to his homeland, proposing a possible teaching job and places for presenting his music. Missing his native land and his family, Prokofiev finally decided to return and settle in the Soviet Union in 1934, a year before starting work on the ballet music for *Romeo and Juliet*.

Shakespeare’s *Romeo and Juliet*, a tragedy written circa 1594–1596, inspired numerous musical compositions, including incidental music, songs, piano pieces, symphonies, and operas. The French composer Berlioz wrote a dramatic symphony and Gounod, also French, wrote an opera. The nineteenth century Russian composer, Tchaikovsky, wrote the fantastic overture. Prokofiev’s ballet music, however, is arguably the most frequently performed among the various pieces based on the Shakespearean play. In 1934, just before returning to Moscow, Prokofiev received a commission for a full-length ballet from the Kirov Theatre in St. Petersburg. The composer chose *Romeo and Juliet* and wrote the ballet score for it in 1935. The Bolshoi Theatre cancelled the contract of premiere, however, saying that the music was impossible to dance to. Prokofiev disagreed such a claim. The problem, perhaps, was not just in the music but also the happy ending, which was a huge change from the original plot. According to the composer, “Romeo arrives a minute earlier, finds Juliet alive and everything ends well.” The main reason for this alteration was based on the composer’s assertion that a dead person cannot be a good dancer on the stage. The revised ballet score with the tragic ending was premiered on stage in Bruno, Czechoslovakia in 1938. The Soviet premiere took place in 1940 at the Kirov Theater with a commercial and critical success.

Before the ballet’s Soviet premiere, the composer extracted two orchestral suites, first performed in 1936 and 1937, respectively (he also created the third suite in 1946). The music in these suites demonstrates some notable characteristics in Prokofiev’s music: its masterful use of modern harmony, his keen sense of drama, and his brilliant orchestration, enhanced by the huge range of dynamics and vibrant rhythms. Additionally, this ballet music depicts each character’s inner feelings with sensitivity. To differentiate the characters, the composer assigned a particular instrument to each character. For example, Romeo is performed by the violin; Juliet, by the flute, the knights in the masquerade, by the French horn and the clarinet. For today’s concert, the maestro Noseda personally selected ballet numbers from the three orchestral suites and created an original concert suite.

Akihiro Taniguchi | For a profile of Akihiro Taniguchi, see p.47



Cプロのシベリウス《クレルヴォ》。クレルヴォ役(バリトン)のヴィッセルサネン、妹役(ソプラノ)のヨハンナルサネン、エストニア国立男声合唱団(合唱指揮:ミッコ・ウレオヤ)の熱演が会場に響き渡った(9月21日)

公演報告

2018年

09

月

定期公演

SUBSCRIPTION CONCERTS
IN SEPTEMBER, 2018

9月定期公演は、首席指揮者のパーヴォ・ヤルヴィが指揮。

ウィーンで活躍したシュトラウス兄弟とマーラーの作品や

ベートーヴェン、ハイドンなどの古典音楽、

そして《クレルヴォ》をメインに据えたシベリウス特集など、

新シーズンの幕開けにふさわしい多彩なプログラムを披露しました。

Aプログラム ヨハン・シュトラウスII世／喜歌劇「こうもり」序曲、ワルツ「南国のぼら」作品388、ボルカ「クラップフェンの森で」作品336、皇帝円舞曲 作品437、ヨーゼフ・シュトラウス／ワルツ「うわごと」作品212、マーラー／交響曲 第4番 長調(2018年9月15、16日、NHKホール) **Bプログラム** シューベルト／交響曲 第3番 二長調 D.200、R.シュトラウス／ホルン協奏曲 第2番 変ホ長調、ベートーヴェン／「プロメテウスの創造物」序曲、ハイドン／交響曲 第102番 変口長調 Hob.I-102(2018年9月26、27日、サントリーホール) **Cプログラム** シベリウス／「レンミンネイネンの歌」作品31-1、「サンデルス」作品28、交響詩「フィンランディア」作品26(男声合唱付き)、「クレルヴォ」作品7(2018年9月21、22日、NHKホール)

9月定期公演すべての指揮を執ったパーヴォ・ヤルヴィ(9月21日)



Aプロのマーラー《交響曲第4番》でソプラノ独唱を務めたアンナ・ルチア・アリヒター(9月15日)



BプロのR.シュトラウス《ホルン協奏曲第2番》でホルン・ソロを披露したラデク・パボラーク(9月26日)

Bプロのシューベルト《交響曲第3番》(9月26日)



公演報告

NHK音楽祭2018

2018年10月1日、NHKホール

NHK Music Festival 2018

世界の名だたる指揮者とオーケストラが集まる「NHK音楽祭」に
今年のN響は首席指揮者バーヴォ・ヤルヴィと出演。
壮大なスケールで奏でられた《カルミナ・ブラーナ》や、
日本初演となった《踊る牧神》など、充実した公演となりました。

ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲、オルフ／踊る牧神 作品21[日本初演]、オルフ／カルミナ・ブラーナ

《カルミナ・ブラーナ》の独唱者たち。左から、ベンジャミン・アップル(バリトン)、オルガ・ベレチャッコ(ソプラノ)、マックス・エマヌエル・ツェンチッチ(カウンターテナー)



オルフ《カルミナ・ブラーナ》。新国立劇場合唱団(合唱指揮:富平恭平)、NHK東京児童合唱団(合唱指揮:金田典子)が出演